

雑談で話し手はどのように 聞き手との間に共通基盤を構築しているか (1)

西郷 英樹

清水 崇文

要旨

会話で話し手は聞き手との間に共通基盤を構築しながら話を展開させている。この話を展開する力はとくに雑談において重要である。なぜならば、人間関係の構築・維持を目的とする雑談では、話していて楽しい人を演出するために、話し手は聞き手に分かりやすく自分の経験談などの話を展開させていくことが必要だからである。しかしながら、談話レベルでの指導がまだ進んでいない現在の日本語教育で、会話での共通基盤の構築の仕方は体系的に教えられていないのではなかろうか。

現在、筆者二人は、日本語教育への応用を目標に、自然会話コーパスを用いて、聞き手との間に共通基盤を構築する際、日本語母語話者がどのような言語形式・ストラテジーを用いているかを分析している。本稿では、話し手のみが知っている内容を共通基盤化する際に使用される言語形式・ストラテジーの中で、使用頻度が高かった「ンダケド」系と「ノ」系に焦点を当て、分析結果を報告する。

【キーワード】日本語教育、会話コーパス、談話、教材開発、終助詞

1. はじめに (課題遂行会話と雑談)

私たちは普段どのような会話をしているだろうか。思いつくままに挙げていくと、「ランチをする約束を忘れたことを妹に謝る」「カフェでママ友とおしゃべりする」「卵売り場の場所をスーパーの店員に聞く」「忘年会のお店を同僚と決める」「大学から最寄り駅まで友人と歩きながら、お互いの近況を話す」などが考えられる。このように日常生活の様々な場面で会話は行われるが、それらは会話の目的と

いう観点から次の2つに大別することができる。まず一つ目が何か特定の課題を遂行するために行われる会話（以下、課題遂行会話）である。先に挙げた例で言えば、「ランチをする約束を忘れたことを妹に謝る」「卵売り場の場所をスーパーの店員に聞く」「忘年会のお店を同僚と決める」が課題遂行会話である。この種類の会話の特徴は、その会話で達成すべき明確な目的があることである。そのため、目的が達成できたかどうか、つまり、成功か失敗かが分かりやすい。二つ目の会話の種類は、いわゆる雑談である。先の例の中では「カフェでママ友とおしゃべりをする」「大学から最寄り駅まで友人と歩きながら、お互いの近況を話す」がこれに当たる。雑談は、その会話で達成すべき明確な目的はないが、当事者間にラポール（信頼関係や心が通いあった状態）を生み出すことで良好な人間関係を育むような会話（清水 2017）であると言えよう。そのため、話す内容よりも話すこと自体に意味があるとも言える。

中井（2012）は「事実や意見などの情報を交換したり、何かを決めたり、要求することを目的とする会話」（p.5）を「交渉会話」、「人間関係を構築・維持することを目的とする会話」（p.5）を「交流会話」と呼んでいるが、「交渉会話」は「課題遂行会話」、「交流会話」は「雑談」に相当すると言えよう⁽¹⁾。課題遂行会話と雑談の違いをより端的に示すとすれば、才田（2017, p.54）の「用のある」時の会話、「用のない」時の会話という説明以上に簡潔でかつ的確なものはないだろう。言うまでもなく、用があるときの会話とは「課題遂行会話」のことであり、用がない時の会話は「雑談」である。

2. 日本語教育における雑談指導

日本語教育では課題遂行会話に焦点を当てた教え方が主流である。この流れを明確に表しているのが、CEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠）を基に国際交流基金が開発し、提唱している課題遂行能力を示す Can-do という考え方⁽²⁾、また同団体と日本国際教育支援協会が実施している日本語能力試験の Can-do 自己評価リスト（JLPT Can-do）⁽³⁾ である。日本国内の学習者が円滑な日常生活を行う上で様々な課題を解決できる日本語力を養う指導が必要なのは言うまでもない。一方、よりよい人間関係の構築・維持に大きく寄与する雑談を円滑に行うための体系的な指導は日本語教育でほとんどなされていない。つまり、現在の日本語教育は用があ

るときに何をどう話すかという指導に焦点を当てており、用がないときに何をどう話すかという指導はほとんどなされていない(才田 2017) と言えよう。かりに学習者に課題遂行会話の指導さえしていれば、雑談力もそれに比例して伸びていくということであれば、雑談指導に力を入れる必要はないと思われる。しかし、日本語能力試験でもっともレベルが高い N1 に合格した日本語学習者でさえ日本語で雑談がなかなか上手にできない(筒井 2012) ことを、教育現場で日々日本語学習者と接している多くの日本語教師は実感しているはずである。

このように日本語教育での雑談指導がほとんど行われていない中で、本稿の筆者である西郷と清水は 2018 年に共著で教師用指導書『日本語教師のための日常会話力がグリーンとアップする雑談指導のススメ』(以下、『雑談指導のススメ』)を上梓した。同書の原稿執筆前に、中級・上級レベルを主とした留学生 106 名を対象に Web アンケートを実施し、日本語で雑談を行う際、日本語学習者が難しいと感じる点を調査した。そのアンケート結果と筆者二人の 20 年以上の日本語教授経験での知見を基に、同書では雑談に役立つ日本語とは何かを論じ、様々な具体的なことば、ストラテジー(とその関連表現)を紹介した。その中で扱ったひとつが本稿のテーマである共通基盤構築である。

3. 共通基盤構築とは何か

本稿で扱う共通基盤構築とは、話し手が次に話したい内容の前提を聞き手との間に形成することである。言い換えれば、次に話を展開させるための下準備である。たとえば、[先週自分が買ったルイ・ヴィトンの財布を昨日駅前の居酒屋のトイレに落とした]という内容を聞き手に伝えたい場合、日本語母語話者(以下、母語話者)はどのように発話を組み立てるだろうか。「先週買ったヴィトンの財布を昨日駅前の居酒屋のトイレに落としちゃった」などと一息で最後まで言い終えることは一般的ではないだろう。まずは[先週話し手がルイ・ヴィトンの財布を買った]ことを聞き手との間の共通基盤(前提)にし、その後、[その財布を昨日駅前の居酒屋のトイレに落とした]というくだりにつなげることが多いと思われる。たとえば、以下のような流れである。

- 1 田中：先週、私、ヴィトンの財布買ったでしょ。
- 2 山田：うん。
- 3 田中：あれ、昨日、駅前の居酒屋のトイレに落としちゃった。

行番号1で、田中は「先週、自分がルイ・ヴィトンの財布を買った」ことを次に話す内容の共通基盤にするという意志を表明している。より厳密に言えば、下線部の「でしょ」がその意志の表明として機能している。行番号2で、山田が相づちの「うん。」で行番号1で表明された田中の意志を理解したことを示し、田中に話の続きを促している。行番号3で、田中は行番号1および2で山田との間で共通基盤にした内容を展開させている。

上記の会話例では、「でしょ」が共通基盤構築の意志表明として機能していたが、「でしょ」が共通基盤として扱える内容は聞き手がすでに知っていることに限定される。言い換えれば、聞き手が知らない内容を共通基盤として扱いたい場合、「でしょ」は使えず、他の言語形式を使用する必要がある。

雑談で聞き手を巻き込みながら話を展開させる、上述のような共通基盤構築の仕方の体系的な指導は、現在の日本語教育には取り入れられていないと思われる。大半の日本語学習者が話を展開させるために使えるものは、文を完結させない活用形である連用形（テ形）や「そして」「でも」などの接続詞ぐらいではなかろうか。共通基盤構築の仕方を学習することは、雑談だけではなく、課題遂行会話を円滑に行うためにも大いに役に立つ。しかし、良好な人間関係の構築・維持を目的とする雑談においては、一緒に話していて楽しい人を演出する日本語力が重要であり（西郷 2021）、相手を巻き込みながら分かりやすく話を展開させられる技量はより重要であると考えられる。

4. 本研究の目的

教材を作成する際に利用される目標言語のサンプル収集方法には、教材作成者が頭の中で自らの言語行動を振り返る内省的な方法や、自然会話データに現れた第三者の実際の言語行動を観察・記述する方法などがある⁽⁴⁾。前述の『雑談指導のススメ』で紹介している、共通基盤構築の際に用いられる言語形式やストラテジーは著者の内省的観察で得られたものである。内省的観察では、頭の中にある母語話者としての長年の言語活動の経験を探索できるため、自分が必要とすることばやストラテジーを効率よく探し出し、それぞれについて吟味をすることができる。しかし、母語話者2名のみを対象とした内省的データでは見落とされたものが多いことが予想される。こうした点に鑑み、本研究では、自然会話データを用いて、実

際に母語話者がどのような言語形式・ストラテジーを用いて聞き手との間に共通基盤を構築しているのかを調査し、日本語学習者の雑談力を育成する教材の開発に有用な情報を得ることを目的とする。なお、教材の使用者は筆者二人が勤務校で長年担当している中級および上級日本語レベル⁽⁵⁾を受講する学習者（主として交換留学生）を想定している。

5. 分析方法

5.1 分析データ

分析に使用した自然会話データは「BTSJ 日本語自然会話コーパス（トランスクリプト・音声）2020 年度版」⁽⁶⁾ に収録されている 21 の会話データ（総分数 485 分 34 秒）である。その内訳は、親しい男性友人同士の雑談が 10 会話（会話の通し番号 001-010）、親しい女性友人同士の雑談が 9 会話（同 011-019）、女性友人同士の雑談が 2 会話（同 207 および 208）で、すべて常体で行われたものである。常体での会話に限定した理由は、交換留学生の雑談相手は約 8 割が友人（西郷・清水 2018）で、友人との会話は一般的に常体で行われるためである。

5.2 分析方法

分析会話の発話の流れを詳細に観察し、話し手が聞き手⁽⁷⁾との間に共通基盤を構築しようとする意図が認められる言語形式・ストラテジーを蛍光ペン（オンライン版は緑色）でマークした。例として、以下の BTSJ-1⁽⁸⁾ および 2 に現れている「じゃん」をその前後の話の流れも含めて見ていただきたい。

18	17-1	/	JF092	「人名1名」と、
19	18	*	JF093	うん。
20	17-2	*	JF092	「人名1名」と、勉強したじゃん。🤔
21	19	*	JF093	うん。
22	20-1	/	JF092	勉強つつー勉強じゃないんだけどさーあ、
23	21	*	JF093	うん。
24	20-2	/	JF092	なんかさー、「人名1名」もちよっと本気になってて、

BTSJ-1 共通基盤構築と判断した例(会話番号 207)⁽⁹⁾

74	70	*	JM001	=あれ、「大学名1」。
75	71-1	/	JM001	ら,,
76	72	*	JM002	<どれ?><.>
77	71-2	*	JM001	<しく><.>ねーの、<あれ><.>
78	73	*	JM002	<あれ?><.>=
79	74	*	JM002	=あの山の上?。
80	75	*	JM001	うん、白いの。
81	76	*	JM002	歩いていけるじゃん、別に。
82	77	*	JM001	ちゃうんだって。
83	78	*	JM001	こっから近いように見えるけど、とう(うん)、途中ですごい上り坂があつて。
84	79	*	JM002	うん。

BTSJ-2 共通基盤構築と判断しなかった例(会話番号 001)

BTSJ-1 の 20 行目で話し手 (JF092) が「[人名 1 名] と、勉強したじゃん。」と言
い、21 行目で聞き手 (JF093) が「うん。」と答えている。その後、22 行目から 20
行目で導入した「[人名 1 名] との勉強」に関する話題を展開させている。このよ
うな場合、話し手が聞き手との間に 20 行目の発話内容（「[人名 1 名] との勉強」）
を共通基盤にする意図があると判断し、また「じゃん」が共通基盤構築の機能を担
っていると考えた。一方、BTSJ-2 の 81 行目の「歩いていけるじゃん、別に。」の
後、話し手である JM002 はその発話内容（[目的地に歩いて行けること]）を展開
させていない。このような場合、話し手には 81 行目の発話内容（[目的地に歩いて
行けること]）を共通基盤にしようとする意図はないと判断した。

次に、共通基盤の内容を、(a)話し手と聞き手が共に知っている場合、(b)話し
手のみが知っている場合、(c)聞き手のみが知っている場合、に分類するために、
蛍光ペンでマークした言語形式・ストラテジーの周り（以下の BTSJ-1 から BTSJ-3
はすべて右側）に異なる 3 種類のシンボルを付した。(a) の場合は BTSJ-1 で示した
ように聞き手を表す左側の顔と話し手を表す右側の顔が共に（オンライン版は赤色
で）塗りつぶされている。(b) の場合は話し手の顔が、(c) の場合は聞き手の顔がそ
れぞれ塗りつぶされている（(b) は BTSJ-3 を、(c) は BTSJ-4 を参照のこと）。

18	17-1	/	JF092	「人名1名」と,,
19	18	*	JF093	うん。
20	17-2	*	JF092	「人名1名」と、勉強したじゃん。 😞😞
21	19	*	JF093	うん。
22	20-1	/	JF092	勉強つつー勉強じゃないんだけどさーあ,,
23	21	*	JF093	うん。
24	20-2	/	JF092	なんかさー、「人名1名」もちよっと本気になってて,,

BTSJ-1 (再掲) (a) 話し手と聞き手が共に知っている場合のシンボル(会話番号 207)

348	312-1	/	JF093	で、別に、で別にタランティーノとか笑ってないんだけど、☹️👁️
349	313	*	JF092	笑ってないんだ。
350	312-2	*	JF093	“ピロリロ、ピロリロ”とかで爆笑なの。
351	314	*	JF092	へー、ネタじゃなく。
352	315	*	JF093	そう。
353	316	*	JF092	意味く分かんない><。

BTSJ-3 (b) 話し手のみが知っている場合のシンボル(会話番号 207)

556	502	*	JF092	でもまだ、短いほうがき、見てられる。
557	503	*	JF093	昨日スマスマ見た?。☹️👁️
558	504	*	JF092	《少し間》見た。
559	505	*	JF092	パレエでしょ?。
560	506	*	JF093	そうそう、てかほんとは原田伸朗は、何、何があたしに似てるんだかさっぱり分かんないんだけどく笑いながら。

BTSJ-4 (c) 聞き手のみが知っている場合のシンボル(会話番号 207)

なお、[共通基盤化する内容を知っている] ことには、実際に知らなくても容易にそれが想像できるものも含めることにした。たとえば、授業に遅刻したら焦るということは実際に聞き手が体験したことがなくても容易にその状況が想像できることであるため、聞き手が知っていることとして扱う。

6. 結果・考察

話し手の共通基盤構築の意図が認められるものは543例あった⁽¹⁰⁾。それらを前述した3つのカテゴリーに分類したところ、共通基盤の内容を[(a)話し手と聞き手が共に知っている場合]が全体の25.8%(140例)、[(b)話し手のみが知っている場合]が72.4%(393例)、[(c)聞き手のみが知っている場合]が1.8%(10例)であった(図1参照)。

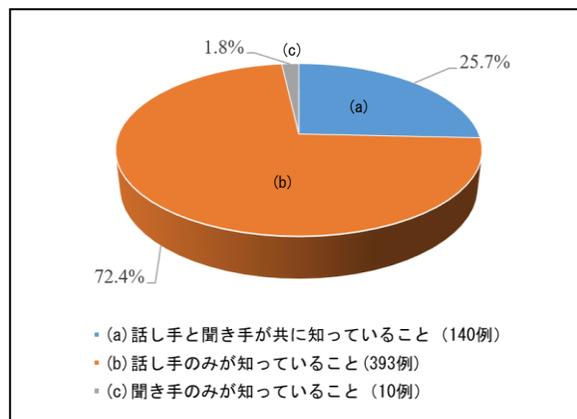


図1 共通基盤の内容を誰が知っているか

また、全ての共通基盤構築例（543 例）の男女比は、男性が 36.6%（199 例）、女性が 63.4%（344 例）で大きな開きがあった。会話の長さの合計時間は男性の会話が 236 分 25 秒（48.7%）、女性の会話が 249 分 09 秒（51.3%）とそれほど差異がないことから、この結果は雑談では女性のほうが男性よりもより頻繁に聞き手との間に共通基盤を構築しながら雑談を行っていることを示唆している。

紙幅の都合上、本稿では分析・考察の対象を上記 3 つのカテゴリのうち、もっとも例数が多かった [(b) 話し手のみが知っている場合] に絞り、[(a) 話し手と聞き手が共に知っている場合] および [(c) 聞き手のみが知っている場合] の分析・考察は別の機会に譲ることとする。

6.1 共通基盤の内容を話し手のみが知っている場合

分析の結果、共通基盤の内容を話し手のみが知っている場合、多様な言語形式・ストラテジーが用いられていることがわかった。この中で基本形とその派生形（長音、音変化、終助詞または間投助詞⁽¹¹⁾ 添えなどの違いを持つもの）と考えられるものを同じ系統としてまとめた（表 1）。なお、各系統の内訳は後述する。

表 1 共通基盤の内容を話し手のみが知っている場合の言語形式・ストラテジー

系統	例数	言語形式・ストラテジー全体に占める各系統の割合 (%)	男女別各系統の例数		系統別例数の男女比 (%)		男女別各系統の内訳 (%)	
			男	女	男	女	男	女
ンダケド	180	45.8	62	118	34.4	65.6	49.2	44.2
ノ	173	44.0	46	127	26.6	73.4	36.5	47.6
ケド	16	4.1	13	3	81.3	18.8	10.3	1.1
ンダッテ	13	3.3	2	11	15.4	84.6	1.6	4.1
ワケ	6	1.5	2	4	33.3	66.7	1.6	1.5
ヨ	3	0.8	0	3	0.0	100.0	0.0	1.1
カナ	1	0.3	1	0	100.0	0.0	0.8	0.0
結論先出しストラテジー	1	0.3	0	1	0.0	100.0	0.0	0.4
計	393	100	126	267	32.1	67.9	100	100

この 8 系統から優先的に日本語教育で導入すべきものを選ぶ必要があるが、その際の基本となる判断基準は使用頻度（出現率）の高さであろう。本稿では、合計

すると全体の約9割を占める「ンダケド」系(45.8%)と「ノ」系(44.0%)を優先的に日本語教育に導入すべき言語形式とみなし、この2系統をより詳細な分析・考察の対象とした。

6.1.1 「ノ」系

まずは、話し手のみが知っている場合の共通基盤構築例の中で、2番目に出現例が多く、また同系統内で様々な派生形が見られた「ノ」系について分析・考察する。

この系統の特徴として、「の」⁽¹²⁾と終助詞との組み合わせが多く見られたため、「の」に後続する終助詞別に下位分類(グループ)を設けた(表2参照)。

表2 「ノ」系の下位分類

下位分類 (グループ)	例数	「ノ」系統 全体に 占める 割合 (%)	各下位分類の 男女別例数		各下位分類の 例数の男女比 (%)		男女別 下位分類の内訳 (%)	
			男	女	男	女	男	女
ノ	86	49.7	2	84	2.3	97.7	4.4	66.1
ノネ	44	25.4	14	30	31.8	68.2	30.4	23.6
ノヨ	41	23.7	30	11	73.2	26.8	65.2	8.7
ノヨネ	2	1.2	0	2	0.0	100	0.0	1.6
計	173	100	46	127	26.6	73.4	100	100

まず各下位分類の内訳を出現率の高い順に見ていく。もっとも出現率が高かった「ノ」グループ(「ノ」系全体の49.7%)は、基本形の「の」が72例(83.7%)、派生形の「んだ」が10例(11.6%)、「の一」が3例(3.5%)、「ん」が1例(1.1%)であった。次に出現率が高かった「ノネ」グループ(「ノ」系全体の25.4%)は、基本形の「のね」が42例(95.5%)、派生形の「のねー」「んね」がそれぞれ1例(各2.3%)であった。「ノネ」グループと出現率が近かった「ノヨ」グループ(「ノ」系全体の23.7%)は、基本形の「のよ」が7例(17.1%)で、派生形の「んだよ」が34例(82.9%)であった。「ノヨネ」グループ(「ノ」系全体の1.2%)は、派生形の「んだよね」と「んだよねー」がそれぞれ1例(各50.0%)であった。

6.1.1.1 「ノ」系の男女差

以下は「ノ」グループでもっとも出現率が高かった「の」が現れている会話例である。

565	543	*	JF013	うん。
566	544	*	JF014	だからー、とりあえず、駅何とか降りてー、ベンチでこう、寝てたの。 😊👉
567	545-1	/	JF014	くでー>{<,,
568	546	*	JF013	<ベン>{>}ちで寝てたの?。
569	545-2	*	JF014	そう。
570	547	*	JF014	でー、よくなってー、“あー、やっぱだめだ帰ろう”と思って1回帰ってー、そのあと夜また行ったの。
571	548	*	JF013	そうだったっけ?。

BTSJ-5 共通基盤構築として機能している「ノ」グループの例(会話番号 017)

BTSJ-5 の会話では、大学のテニス部で過去に実施された合宿先に向かう際、話し手(JF014)が電車の中で貧血になってしまったという話をしている。566行目で、[電車から降りて、(駅構内の)ベンチで寝ていた]ことを「の」で聞き手(JF013)との共通基盤にしている。567行目の「でー」は話し手が話を展開させる意図を示しているが、568行目の聞き手からの驚きを伴った確認(「ベンチで寝てたの?。」)と569行目の話し手の応答(「そう。」)が挿入されており、570行目から、仕切り直しの「でー、」で話の展開を再開している。

上記BTSJ-5で見られたような「ノ」グループであるが、表2からわかるように、男性の使用の割合が2.3%(2例)なのに対し、女性の使用の割合が97.7%(84例)と非常に高いことがわかる。本稿で使用したのとは異なる自然会話データを分析した三枝(2011)も話し言葉に現れる言い切りの「の」の女性の使用頻度がきわめて高いと述べている。こうした男女の差異は、日本語教育に応用する際に有益な情報であろう。

「ノネ」グループに関しては、女性の使用が68.2%(30例)に対して、男性の使用が31.8%(14例)で「ノ」グループと同様に女性の使用の割合が高かった。しかし、男性の使用例も女性の約半数見られることから、「ノ」グループとは違い、女性の使用に著しく偏ってはいないことがわかった。

「ノヨ」グループは、「ノ」グループおよび「ノネ」グループとは対照的に男性の使用の割合が73.2%(30例)、女性の使用の割合が26.8%(11例)で、男女の使用率で大きな逆転現象が見られた。この詳細は6.1.1.4で考察することにする。

「ノヨネ」グループに関しては、男性の使用はなく、女性が使用した2例のみで、男女の使用傾向を導き出すには例数が不十分であった。

6.1.1.2 「ノ」グループの「んだ」

以下の BTSJ-6 は、「ノ」グループで基本形の「の」(83.7% [72 例])の次に出現率が高かった「んだ」(11.6% [10 例])の使用例である。

26	20-3	/	JF092	なんかさ、教材渡されて、それを読んで、
27	23	*	JF093	うん。
28	20-4	/	JF092	んでなんかー、何だっけ、あの一、何つうの?、その感想を、
29	24	*	JF093	うん。
30	20-5	*	JF092	自分たちで書くんだ。😊👉
31	25	*	JF093	うんくうん>{<}。
32	26-1	/	JF092	くで>{<}、来週、っていうか今週??、の、あの一、サザエさんの時間に(うん)、えーと、読んで、その教材を、
33	27	*	JF093	うんうんうん。

BTSJ-6 「ノ」グループの「んだ」の例(会話番号 207)

この会話部分の直前の内容は、話し手(JF092)と聞き手(JF093)が共に知っている「人名1名」がグループ課題に真面目に取り組み始めたというもので、26行目から30行目で「渡された教材の感想を書く」という課題の内容について話し手が説明をしている。そして、話し手はこの説明を「んだ」で共通基盤にする意志を表明している。その後、31行目で聞き手の理解の表明(「うんうん。」)が続き、32行目の「で、」から話し手はこの共通基盤に基づいた話題を展開させている。

分析した21の会話データで共通基盤構築に使用された「んだ」は10例観察されたが、「んだ」を使用した話し手は2名(JF092 および JF094)に限定されていた。つまり、残りの40名は「んだ」を使用しなかったということである。この結果から、共通基盤構築の際の「んだ」の使用が一般的ではない可能性が高く、日本語教育で共通基盤構築の言語形式として「んだ」を導入する必要性は低いものと考えられる。

6.1.1.3 「ノ」グループと「ノネ」グループの使い分け

「ノネ」グループは、「の」に終助詞の「ね」が付加したものである。この「ノネ」グループと「ノ」グループの間には意味機能でなにか違いがあるのだろうか。「のね」と「の」が短間隔で現れている以下の BTSJ-7 を見てみよう。

548	515	*	JF009	とにかく揚げもんが。
549	516	*	JF009	なんか、夜は揚げ物みたいな。
550	517	*	JF010	えー[驚いたように]。
551	518	*	JF009	朝は一、なんか、パンとご飯と選べてたのね。☺➡
552	519	*	JF010	うん。
553	520	*	JF009	で、なんか、ご飯食の人は、味噌汁お替り自由みたいな感じで。
554	521	*	JF010	へー。
555	522	*	JF009	パン食の人は一、パンお替り自由みたいな感じで(ほんほんほんほん)、やってー。
556	523	*	JF009	朝はバイキングっぽかったんだけど。
557	524	*	JF009	=でもねー、すごい品数が少ないの。☺➡
558	525	*	JF010	あー。
559	526	*	JF009	なんか、でっかい食事がぼーんて(うん)、ちよろちよろって野菜があつて(うん)、で、ご飯、味噌汁みたいな(はーん)、そんな感じだった。

BTSJ-7 「のね」と「の」の使い分けの例(会話番号 015)

BTSJ-7 の前 (511 行目) から話し手 (JF009) が中学校時代の寮生活でのまかないについて話しており、551 行目で話題が夕食から朝食に移り、[朝食はパンとご飯が選択制になっていた] ことを「のね」で共通基盤化している。その後、話し手は 553/555/556 行目で [朝食はバイキング形式に近く、ご飯食の人は味噌汁の、パン食の人はパンのおかわりが自由である] と話を展開している。そして、557 行目で話し手は [朝食の品数がすごく少なかった] ことを「の」で共通基盤化し、559 行目でその詳細を説明する形で話を展開している。

ここで注目したいのは、551 行目の「のね」の使用と 557 行目の「の」の使用である。なぜ話し手は「のね」と「の」を使い分けたのだろうか。その理由は、それぞれが付加された内容 (話し手が共通基盤にしようとしている内容) の「物語」の要素としての重要度の違いにあるのではないかと思われる。話の流れの観点からすると、551 行目の [朝食はパンとご飯が選択制になっていた] ことは、その後に語られる朝食の内容の前置きの情報となっている。一方、557 行目の [朝食の品数がすごく少なかった] ことは、この話のハイライトとして話し手がかつても強く伝えたいことであろう。

Yoshimi (2001) では、「んですね」(「のね」の丁寧体) の機能を、後続する物語の内容 (物語の中心的内容や物語の意味そのもの) に聞き手の注意を惹きつける役割や物語の中心に進む前に、聞き手が物語についてきているかどうかを確認する働きがあるとしているが、551 行目の「のね」はまさにそうした役割を担っていると思われる。また、文末に現れる「の」には「話し手の気持ち、物事の有様を強く提示する」(三枝 2011, p.234) 用法があることが指摘されているが、557 行目の「の」はこの一連の物語の中で話し手が聞き手に一番伝えなかったこと (朝食の品数が少ないことに対する不満や落胆) を効果的に伝える働きをしていると言えるだろう。

こうした談話上の働きがうまく機能していることは、聞き手の反応からもうかがえる。[朝食はパンとご飯が選択制になっていた]ことへの話し手の応答(552行目)は「うん。」であるが、これは、聞き手が話し手の話を聞いていること、またはここまでの話を理解していることを示す相づちであり、発話内容に対する聞き手の考えや感情は含まれていない。一方、[朝食の品数がすごく少なかった]ことへの聞き手の応答(558行目)は、「うん」ではなく、理解と同情が混在した「あー。」であり、そこには相手(話し手)の不満や落胆の気持ちに対する聞き手の態度が表明されていると捉えることができる。

6.1.1.4 「ノヨ」グループ

「の」に終助詞の「よ」が付加されたものが「ノヨ」グループである。6.1.1.1で述べたように、女性が使用する傾向が高い「ノ」系にあって、「ノヨ」グループは、本研究で分析対象となった会話データを見る限り、男性の使用の割合が高いことがわかった(男性73.2% [30例] / 女性26.8% [11例])。また、本グループの内訳は、基本形の「のよ」が7例(17.1%)、派生形の「んだよ」が34例(82.9%)であった。

「のよ」の使用率の男女比は、男性が28.6%(2例)、女性が71.4%(5例)であり、女性の使用が7割を超えているが、例数が少なく今回の結果だけでは女性の使用が顕著であると結論づけることは難しいだろう。一方、「んだよ」の男女比は、男性が82.4%(28例)、女性が17.6%(6例)で、男性の使用の多さが顕著であり、これが「ノヨ」グループで男性の使用比率が女性を上回っている原因であることがわかった。また「んだよ」の男性による使用が10の会話データのうち7つで現れていることから、男性の間では一般的な言語形式であると言えよう。以下のBTSJ-8は「んだよ」の男性の使用例である。

351	321-2	*	JM006	おれか、おれからじゃないな。
352	322	*	JM005	あつちから？
353	323	*	JM006	いや、あつち、あ、ちやうちやうちやう。
354	324	*	JM006	もう、“おれは一、もう高校辞めます”っていう話(うん)をした、し、もうそんなときには、別れられると思ったんだよ。☹️🔴
355	325	*	JM005	うん。
356	326	*	JM006	高校辞めちゃ、あ、おれも、働こうと思ってたし(うん)、関係なくなるじゃん。
357	327	*	JM005	うん。
358	328	*	JM006	で、あ、で、言ったら(うん)、“何で辞めるの？”とか言われてく笑いながら(うん)、“そんなん、普通に卒業すればいいじゃない”とか言って(うん)、“別に、家庭の事情があるわけじゃないんだし”とか(うん)いって、“やー、でも、辞めるよ”って言って。
359	329	*	JM005	うん。
360	330	*	JM006	<笑い>そしたらもう<笑いながら>、おれも、まー、でも向こうもあったんだよ、メールが。
361	331	*	JM005	あん。☹️🔴
362	332	*	JM006	これ、ちゃんとどうすんの？って。
363	333	*	JM005	うん。
364	334	*	JM006	大学行くの？とか。

BTSJ-8 男性の「んだよ」の例(会話番号 003)

BTSJ-8の前では、高校で怠惰な生活を送っていた話し手(JM006)が彼女に会うたびに自分の生活態度について説教をされていたという会話がなされており、BTSJ-8の直前では話し手自身から別れ話を切り出したのかと聞き手(JM005)が問うている。話し手は、351/353行目で当時の状況を思い出そうとし、354行目で「高校を辞めると彼女と別れることができると思った」ことを「んだよ」で共通基盤化している。355行目の聞き手の相づち「うん。」はこれから共通基盤を基に話を展開させようという話し手の意図を理解したことを示している。356行目で話し手は「高校を辞めて働き始めれば、彼女との接点もなくなる(「関係なくなる」)」と話を展開している。358行目で、その後の話し手と彼女の言い合いの内容が明かされ、360行目で、「後日彼女から電子メールでの連絡があった」ことを再度「んだよ」で共通基盤にしている。361行目の聞き手からの「あん。」(「うん」の音変化)という相づちの後、話し手は彼女からの連絡の内容を詳述する形で話を展開している。

以上、「んだよ」の男性の使用例を紹介したが、「んだよ」の例数の2割近く(17.6%)が女性の使用であり、また女性の11の会話のうち、4会話で「んだよ」が出現していたため、その使用が男性特有だとは言えないようだ。以下のBTSJ-9の561行目は、女性の「んだよ」の使用例であるが、特段違和感を感じられない。

558	536	*	JF013	も、行きはさー、もう雨で(うん)、どうしよー(うんうん)みたいな感じだったしさ。
559	537	*	JF014	行きねー、あれ辛かった[感情を込めて]。
560	538	*	JF013	ねー、<あの雨でびっちょびちょ><。😊☝
561	539	*	JF014	<あたしあの台風の><雨><中、1人で行ったんだよ、貧血起こして。
562	540	*	JF013	え[驚いたように]、そうだったっけ?。
563	541	*	JF014	そう。
564	542	*	JF014	行きにー、バス、電車中で貧血起こしてー(うんうんうん)、立てなくなっちゃったのね。
565	543	*	JF013	うん。
566	544	*	JF014	だからー、とりあえず、駅何とか降りてー、ベンチでこう、寝たの。
567	545-1	/	JF014	<でー><。、

BTSJ-9 女性の「んだよ」の例(会話番号 017)

「んだよ」に関連して、今回の分析では、共通基盤構築の際に「んだね」の使用された例は一例もなかった。この結果から、話し手のみが知っている内容を共通基盤化する際に「んだね」は使用されないことが示唆された。

6.1.1.5 「ノヨ」グループと「ノネ」グループの意味機能の違い

次に「ノヨ」グループと「ノネ」グループの意味機能の違いについて考察する。

「のよ」と「のね」が短間隔で現れている以下の BTSJ-10 を見てみよう。

162	151	*	JF010	=聞いてたからー、こないだね(うん)、図書館でね、ついに見たのよ。😊☝
163	152-1	/	JF010	<その、図書館><。、
164	153	*	JF009	<その人を?><。>
165	152-2	*	JF010	うん。
166	154	*	JF010	一階のね、あの、机、机のい、一番奥のほうにいつもいるのね。😊☝
167	155	*	JF009	へー。
168	156	*	JF010	おかつばでスカートなんだけど、イメージ通りだったんだけどさー(く笑い)。
169	157-1	/	JF010	そしたらね、あんね、
170	158	*	JF009	どした?。
171	157-2	/	JF010	あのほら楽譜、立てるやつ(うん)、こう譜面台がさー、
172	159	*	JF009	あ、はいはいはいはい。
173	157-3	/	JF010	あの、譜面台っていうか、

BTSJ-10 「のよ」と「のね」の使い分けの例(会話番号 015)

BTSJ-10 に至るまでの話は、[大学1年生のある授業を履修している50代らしき女性が非常に勉強熱心だ]という話を JF010 が以前から友人に聞いていたという内容である。162行目で、話し手(JF010)が[ついにその女性を図書館で見た]ことを「のよ」で共通基盤化している。そして、166行目からその女性を見た時の状況の説明をする形で話を展開しているのだが、166行目で[図書館の一階の一番奥の方にその女性がよくいる]ことを「のね」を用いて共通基盤化している。

ここでの「のよ」と「のね」の違いも、6.1.1.3で論じた「の」と「のね」の違いに類似したものだと考えられるのではなからうか。つまり、162行目で「のよ」で共通基盤化された[ついにその女性を図書館で見た]ことがこの物語のハイライト

部分であり、166 目で「のね」によって共通基盤化された [図書館の一階の一番奥の方にその女性がよくいる] ことは話し手がその女性を目撃した状況を詳しく説明するための前提でしかないということである。終助詞の「よ」は、「まだ相手が充分認識していない情報や話し手の方がより確実に握っている情報について、注意を促しながら相手に訴えるために使われる」(メイナード 2005, p.383) ことから、162 行目の「のよ」は、ついにその女性を目撃したときの話し手の興奮がいかにすごかったかを聞き手に訴える働きをしていると言えよう。この「よ」の働きで「ノヨ」グループは、同じハイライト機能を持つ「ノ」グループと比べ、より明示的にハイライト部分を際立たせることができるのではないかと考える。

次は、「んだよ」がハイライト部分を示す働きをしている例である。

393	364	*	JM019	あー。
394	365	*	JM019	もうすぐCDがう、できるんだよ。😊👉
395	366	*	JM020	何の?。
396	367-1	/	JM020	<あの><く>、
397	368	*	JM019	<作っ><て>、この前、作って。
398	367-2	*	JM020	この前、え、どれ、どれっつーか。
399	369	*	JM019	えっとねー、この前やったやつじゃない、やったバンドじゃないバンド。
400	370	*	JM019	新しいバンドっていうか。
401	371	*	JM019	で、“今レコーディングしてんだけどさー”って[おどけた口調で]。
402	372	*	JM020	<<静かな笑い>><く>。

BTSJ-11 ハイライト機能の「んだよ」の例(会話番号 010)

BTSJ-11 の前では、話し手 (JM019) が大学の集中講義の期間に学内でライブをしていたことについて話しており、394 行目で話し手が [もうすぐ自分の CD (コンパクトディスク) ができる] ことを聞き手 (JM020) に伝え、「んだよ」で共通基盤化している。その直後に、聞き手からの質問、話し手からの答えが挿入部分として現れ、401 行目から 394 行目で共通基盤とした発話内容を CD 制作の詳細を描写する形で展開させ始めている。

394 行目に現れている「んだよ」であるが、その代わりに「もうすぐ自分の CD ができるのね⁽¹³⁾」などと「ノネ」グループを用いても不自然な印象は与えないだろう。しかし、「のね」を使うと、[もうすぐ自分の CD ができる] ことよりも重要な内容がこの後に語られることになり、[もうすぐ自分の CD ができる] ことが話し手の一番訴えたかったこと (物語のハイライト) ではなくなってしまう。そのため、話し手は 394 行目で「んだよ」を用いたのであろう。

上記の BTSJ-10 および BTSJ-11 で、話し手は物語の冒頭部に聞き手の興味や関心

を惹きつけるハイライト部分を持ってきて、そのあとで状況の詳細を説明するという談話構成をとっている。このような談話構成において、ハイライト機能を持つ「ノヨ」グループが効果的に用いられていることが今回の分析で明らかになったと言えよう⁽¹⁴⁾。

以上見てきたように、話のどの部分がハイライト部分なのかを示す談話標識（「ノ」グループや「ノヨ」グループ）と後続する物語の内容に聞き手の注意を惹きつける機能を持つ談話標識（「ノネ」グループ）の使い分け⁽¹⁵⁾ができると、談話の中でのハイライト部分の位置を自由に操れるようになるため、日本語学習者にも有益な情報であると思われる。

6.1.1.6 「ノヨネ」グループ

6.1.1 で述べたように、「ノヨネ」グループが共通基盤構築に使用されていた例は2例（「んだよね」と「んだよねー」が各1例）のみで、どちらも女性の使用であった。まずは、そのうちの1例を見てみよう。

647	587-2	*	JF093	こないだ、なんか、こないだってか、会ったんだよね、せ、その先生に。
648	589	*	JF092	##。
649	590	*	JF093	中1くらいのときに、くやめたんだけど<>。 😊👉
650	591	*	JF092	くどこで会ったの?><、名古屋で?。
651	592	*	JF093	違う、車でお母さんが走ってたら、その前が、その先生の車だったのー。
652	593	*	JF092	うーわ。
653	594	*	JF093	違う、なんか分かったんだって。
654	595	*	JF092	あ、なんか感じたんだね。
655	596	*	JF092	く“あ、きたきた”><。
656	597	*	JF093	く“あ、この先生だ”><とかって。
657	598	*	JF093	私超落ちこぼれだったから、“逃げろ逃げろ逃げろ”とかって。

BTSJ-12 共通基盤構築として機能している「んだよね」の例(会話番号 207)

BTSJ-12の直前では、話し手(JF093)が中学時代の先生が怖かったという話をしており、647行目で「先日その怖い先生に会った」という発話内容を「んだよね」で共通基盤化している。そして、649行目から、その時の状況を説明する形で話を展開させている。

以下は「ノヨネ」グループの2例目が現れている会話例である。

440	415	*	JF011	うーん、微妙だなー。
441	416	*	JF011	=そんなこんなで夏休み、じぶ、なんか、毎年なんだよねー。😊🌕
442	417	*	JF011	=毎年、“夏休みあれやろう、これやろう”と思いつつもー(うん)、なんかやっぱ、最初の2、3日は無条件でダラダラしちゃうしー。
443	418	*	JF012	うん。
444	419	*	JF012	<ね><く>。
445	420-1	/	JF011	<なん><か>、。
446	421	*	JF012	<気づいたら終わりそう><く>。
447	420-2	*	JF011	<1日、1日が><1個の用事で、だけで、終わっちゃうんだよね、結構。
448	422	*	JF012	うん。

BTSJ-13 共通基盤構築として機能している「んだよねー」の例(会話番号 016)

BTSJ-13の直前では、話し手(JF011)が夏休みに入って自分が思うような時間の使い方ができていないことを聞き手(JF012)に伝えている。そして、441行目で話し手は「毎年の夏休みは同じ」ことを「んだよねー」を用いて共通基盤化し、その後の行でどのように同じなのか説明をする形で話を展開している。

この2つの「ノヨネ」グループの使用に共通することは、どちらも他の「ノ」系と差し替えても不自然にならないことである。たとえば、BTSJ-12の647行目の「会ったんだよね、せ、その先生に。」の「んだよね」の代わりに「の」「のね」「のよ」のどれが使用されても話の流れが不自然に感じられることはないだろう。

では、「ノヨネ」グループの特徴とはなんだろうか。今回の2例だけに限って言えば、どちらもすでに聞き手と共有している話題に関連する話題を新しく会話場に提示する際に使用されているということである。1つ目の例(BTSJ-12)では「中学校の先生」が、2つ目の例(BTSJ-13)では「今年の夏休みの怠惰な生活」がすでに共有の話題として扱われており、それぞれに「その先生に会った」、「毎年同じだ」という新しい情報が話し手によって共通基盤として会話場に提示され、話が展開されている。

「ノヨネ」グループのこのような特徴のためか、直前の話題とはまったく関連のない話題を提供する際に、「ノヨネ」グループで共通基盤化すると不自然に聞こえるようだ。たとえば、BTSJ-14の468行目までの話題は天気・天候であったが、469行目から話し手(JF095)が突然話題を変え、「グループ閲覧室でスクャナーを使用した」ことを「の」で共通基盤化している。

465	442	*	JF094	=地震はワクワクしない<2人笑い>。
466	443	*	JF095	いやードキドキするよね<笑い>。
467	444	*	JF094	<ドキドキするよね><く>。
468	445	*	JF095	<“あっあっ”て><く>。
469	446-1	/	JF095	今日初めてね(うん)、パソコン、ね、あっちのグループ閲覧室のー(うん)、ひろいやつがあるんだけどー、
470	447	*	JF094	うんうんうん。
471	446-2	*	JF095	スキャナーを使ったの。😊👉
472	448	*	JF094	あー、<どうだった?><く>。
473	449	*	JF095	<おもしろ><く>、すごい便利。
474	450	*	JF094	へー、何読み取ったの?。

BTSJ-14 「ノヨネ」グループに差し替えると不自然な「の」の例(会話番号 208)

この「の」を「んだよね」に差し替え、「スキャナーを使ったんだよね。」にすると、会話の流れが不自然に聞こえはしないだろうか。西郷(2018)が指摘しているように、終助詞「ヨネ」には聞き手になんらかの推論を働かせようという話し手の意図(暗示効果)が見え隠れするからである。ある意味、意味深な発話になるのである。そのため、かりに話し手が「スキャナーを使ったんだよね。」と言った場合、聞き手はどのような返答を期待されているか戸惑ってしまうだろう。

ただし、上記の2例を基に導き出した「ノヨネ」グループの特徴に関しては、今後、より多くの使用例を基にその妥当性を確かめる必要がある。

6.1.2 「ンダケド」系

共通基盤の内容を話し手のみが知っている場合に使用される言語形式で、もっとも使用頻度が高かったものが45.8%を占めた「ンダケド」系(180例)である。本系統の男女のそれぞれの使用率の割合(例数)は、男性が34.4%(62例)、女性が65.6%(118例)であった(6.1の表1参照)。同表にあるように、話し手のみが知っていることを共通基盤化している例の総数(393例)の男女比が、男性が32.1%(126例)で女性が67.9%(267例)であることを考えれば、「ンダケド」系の使用が男女どちらか一方に大きく偏っていないことがわかる。「ンダケド」系の内訳でもっとも例数が多かったのが基本形である「んだけど」の101例(56.1%)であった。最尾の「ど」が長音化されている「んだけどー」(43例)が次に多く、この2つで全体の80.0%を占めている。以下、「んだけど」と「んだけどー」を一例ずつ紹介する。

322	297	*	JM005	何やって?= =バレーだっけ?。
323	298	*	JM005	=バレーだっけ?。
324	299	*	JM006	バトミントン。
325	300	*	JM005	バトミントンか=。
326	301	*	JM006	=そうそう=。
327	302	*	JM005	=うん。
328	303	*	JM006	高1の終わりぐらいに(うん)、バトミントン関係で一、(うん)付き合ってたんだけど<笑い(うん)、段々さ、高2になってさ(うん)、ぼろくそになってくんだよ=。☺👉
329	304	*	JM006	=なんか、成績とかもさ(うん)、とりあえずよかったじゃん。
330	305	*	JM005	うん。
331	306	*	JM006	あー、これ、安泰だなみたいなく少し笑いながら>。
332	307	*	JM005	うん。
333	308	*	JM006	で、部活も結構行ってるじゃん。
334	309	*	JM005	<うん><く>。
335	310	*	JM006	<お><く>、よみたいなく笑いながら>。
336	311	*	JM005	うん。
337	312	*	JM006	これはエリート街道かみたいなく笑いながら>。
338	313	*	JM005	うん。
339	314	*	JM006	で、段々だるくなってきてさ<笑いながら>(うん)、ま、部活はまあまあやってたけど(うん)、成績なんてのは、もう、模試すら受けなくなって(うん)、もうぼろくそなんて(うん)、そんなとき、高1の終わりぐらいから付き合ってた子だけでも(ほー)、段々段々それに、もうむかつ腹が立ってきて(うん)、<笑い>“何なの?、これは”みたいなく<笑いながら>=。

BTSJ-15 共通基盤構築として機能している「んだけど」の例(会話番号 003)

BTSJ-15 の 322-327 行目で話し手 (JM006) が高校の時に入っていた部活動が何だったかという話になり、その流れで、話し手は聞き手 (JM005) に 328 行目で [高1の終わりに同じバトミントン部に入っていた人と付き合っていた] ことを述べている。そして、これを「んだけど」で共通基盤化し、[高校2年生になってから、次第に生活がすきんだものになっていった] 話で会話が展開されている。

次の BTSJ-16 では、話し手 (JF009) が [夏にオーストラリアで日本語を教えるボランティアをしたがっていた知人がいた] ことを「んだけどー」で共通基盤化し、その知人は多忙で行けないため、春に行くと言っていたという話で会話を展開している。

857	812	*	JF010	ほんとすごい。
858	813	*	JF009	そう、うちのクラスの子もねー、なんかこの夏に一(うん)、オーストラリアに行っ一、その日本語教育??、きょう、日本語一、教える一(うん)、そのボランティアで、っていうのを行きたいって言ってた子がいたんだけどー、夏はもうなんか、やるが多すぎて、だめだ(うん)から(うーん)、春に行くとか言ってるさ。☺👉
859	814	*	JF010	まめは、必ずどっか行ってるよね。

BTSJ-16 共通基盤構築として機能している「んだけどー」の例(会話番号 015)

「ンダケド」系には上述の「んだけど」「んだけどー」の他に、「んだけどさー」(9例 [5.0%])、「んだけどさ」(8例 [4.4%])、「んやけど」(7例 [3.9%])、「んけどー」(3例 [1.7%])、「んやけどー」「んだけどね」「んけど」(各2例 [各1.1%])、「んやけどね」「んだけどさん」「のやけど」(各1例 [各0.6%])が含ま

れる。

6.1.3 「ンダケド」系と「ノ」系の違い

話し手のみが知っていることを聞き手との間の共通基盤にする際に頻繁に用いられる「ノ」系と「ンダケド」系であるが、これらの系統には意味機能において何か違いがあるのだろうか。

6.1.3.1 「ンダケド」系と「ノ」系との互換性

以下の BTSJ-17 の 665 行目に現れる「ンダケド」系の「んだけどー」は、物語の中心に進む前に聞き手が物語についてきているかどうかを確認する働きがある「ノネ」グループ (6.1.1.3 参照) と差し替えても (「地元でね、友達が、今、ろうぎん、ええと、銀行??、みたいなどこ行ってんのね」)、まったく違和感はないと思われる。

665	604-2	/	JF092	<地元でね>{、友達が、今、ろうぎん、ええと、銀行??、みたいなどこ行ってんだけどー、
666	606	*	JF093	うん。
667	604-3	*	JF092	やっぱさ、地元でさ、昔習ってた小学校のときとかの先生とか、来る<わけよ>{。}

BTSJ-17 共通基盤構築として機能している「ンダケド」系の例 (会話番号 207)

このように、「ノネ」グループと互換性が高い「ンダケド」系であるが、それは上記の「ノネ」グループの機能と、後続する内容を聞き手が理解するために必要な背景情報を提供する (Yoshimi 2001) 「ンダケド」系の機能との親和性が非常に高いからであろう。

一方、「ンダケド」系と、話のどの部分がハイライト部分なのかを示す「ノ」グループや「ノヨ」グループ (6.6.1.3 および 6.1.1.5 参照) を差し替えると、「地元でね、友達が、今、ろうぎん、ええと、銀行??、みたいなどこ行ってんの/のよ」となるため、[友人が労働金庫で働いていること] がハイライトされた部分であると聞き手が誤解釈してしまう恐れがある。言うまでもないが、話し手が聞き手により伝えたいのは 665 行目の「んだけどー」の後に現れる 667 行目の [昔教わった小学校の先生も来ることがある] であり、[友人が労働金庫で働いていること] はその背景情報にすぎない。

このように、「ンダケド」系はハイライト機能を持つ「ノ」グループや「ノヨ」グループへ差し替えられると、話し手が物語をどのように展開させていこうとして

いるのかが聞き手に正確に伝わらなくなる。

次に、「ノ」グループや「ノヨ」グループを「ンダケド」系へ差し替えてみたところ、こちらも話の流れが不自然になることがわかった。たとえば、以下の BTSJ-7 の 557 行目「すごい品数が少ないの」の「の」を「んだけど」に差し替えて「でもねー、すごい品数が少ないんだけど。」にすると、話の流れが不自然に感じるであろう。

548	515	*	JF009	とにかく揚げもんが。
549	516	*	JF009	なんか、夜は揚げ物みたいなの。
550	517	*	JF010	えー[驚いたように]。
551	518	*	JF009	朝は一、なんか、パンとご飯と選べてたのね。
552	519	*	JF010	うん。
553	520	*	JF009	で、なんか、ご飯食の人は、味噌汁お替り自由みたいなの感じで。
554	521	*	JF010	へー。
555	522	*	JF009	パン食の人は一、パンお替り自由みたいなの感じで(ほんほんほんほん)、やっててー。
556	523	*	JF009	朝はバイキングっぽかったんだけど。
557	524	*	JF009	=でもねー、すごい品数が少ないの。☺️👄
558	525	*	JF010	あー。
559	526	*	JF009	なんか、でっかい食事がぼーんて(うん)、ちよろちよろつと野菜があつて(うん)、で、ご飯、味噌汁みたいなの(はーん)、そんな感じだった。

**BTSJ-7(再掲) 「ンダケド」系と差し替えると不自然になる「の」の例
(会話番号 015)**

なぜ「んだけど」に差し替えると不自然になるのか。その理由は 6.1.1.3 で見たように [朝食のバイキングの品数が少ない] ことは、この (中学校時代の寮生活でのまかないの) 物語の中でも話し手 (JF009) が強調したい部分 (ハイライト部分) だからである。そのため、「すごい品数が少ないんだけど」と言うと、この部分は単なる背景情報で物語の重要な部分ではないことを示すことになり、[朝食のバイキングの品数が少ない] という事実を強調し、それに対する自己の不満や落胆を訴えるという話し手の意図と食い違いが生じることになってしまうのである。

同様の説明が、次の BTSJ-10 に現れた 162 行目の「のよ」にも適用できる。

162	151	*	JF010	=聞いてたからー、こないだね(うん)、図書館でね、ついに見たのよ。😊👉
163	152-1	/	JF010	<その、図書館><い>,,
164	153	*	JF009	<その人を?><い>。
165	152-2	*	JF010	うん。
166	154	*	JF010	一階のね、あの、机、机のい、一番奥のほうにいつもいるのね。
167	155	*	JF009	へー。
168	156	*	JF010	おかつぱでスカートなんだけど、イメージ通りだったんだけどさー(笑い)。
169	157-1	/	JF010	そしたらね、あんね,,
170	158	*	JF009	どした?。
171	157-2	/	JF010	あのほら楽譜、立てるやつ(うん)、こう譜面台がさー,,
172	159	*	JF009	あ、はいはいはいはい。
173	157-3	/	JF010	あの、譜面台っていうか,,

BTSJ-10(再掲) 「ンダケド」系と差し替えると不自然になる「のよ」の例
(会話番号 015)

6.1.1.5 で見たように、162 行目の「のよ」で共通基盤化された [(以前から噂になっていた) 非常に勉強熱心な 50 代らしき女性を図書館で見た] ことがこの物語のハイライト部分である。この「のよ」を「んだけど」に差し替えると、「こないだね、図書館でね、ついに見たんだけど」となり、噂になっていた女性をついに見たという「衝撃の出来事」が、物語のハイライトではなく、単なる背景情報として扱われることになってしまう。そのために、不自然な会話の流れに聞こえてしまうのである。

6.1.3.2 「ノ」系の後に現れやすい接続詞・接続表現

今回の分析で、共通基盤化が「ノ」系で行われた後、それに基づいて展開される発話の文頭になんらかの接続詞や接続表現が少なからず現れることがわかった。たとえば、以下 (BTSJ-5) の 566 行目では「の」が直前の発話内容の共通基盤化に用いられているが、次行 (567 行目) に現れる後続発話の文頭が接続詞「でー」で始まっている。

565	543	*	JF013	うん。
566	544	*	JF014	だからー、とりあえず、駅何とか降りてー、ベンチでこう、寝てたの。😊👉
567	545-1	/	JF014	<でー><い>,,
568	546	*	JF013	<ベン><い>ちで寝てたの?。
569	545-2	*	JF014	そう。
570	547	*	JF014	でー、よくなってー、“あー、やっぱだめだ帰ろう”と思って1回帰ってー、そのあと夜また行ったの。
571	548	*	JF013	そうだったっけ?。

BTSJ-5(再掲) 「の」の後に現れる接続詞の例(1) (会話番号 017)

「ノ」系の全 173 例中、こうした接続詞や接続表現が現れているものは 66 例 (38.2%) あった。その内訳は、順接・添加 (時系列) を表すものが 58 例 (「で」⁽¹⁶⁾)

(24例 [以下同様])、「だから」(8)、「で一」(6)、「だから一」(3)、「したら」「そんで一」(各2)、「そしたら」「そしたら一」「そしたらさ一」「そしたらね」「したらさ一」「ほしたらさ一」「そうすると」「そうすると一」「それで」「でさ一」「でね一」「んで」「そして」(各1))、逆接を表すものが8例(「でも」(5)、「だけど」「だけど一」「なのに」(各1))であった。

以下の BTSJ-18 では、話し手 (JF001) が 43 行目と 45 行目で「の」を用いて直前の発話内容を共通基盤化している。それぞれの直後で聞き手 (JF002) から反応 (44 行目の「あーあーあーあー。」と 46 行目の「ふーん。」) が現れた後、話し手は、45 行目で逆接の接続詞「でも」を、47 行目で添加の接続詞「で」を用いて、その後、話を展開している。

41	35-1	/	JF001	なんか、「人名5」さんそんときに一(うん)、食う米に困ってて一(うん)、で一、
42	36	*	JF002	欲しかったんだく笑いながら。
43	35-2	*	JF001	本気で欲しかったらしくて(ここまで、JF002は笑っている)(うん)、ほんととはでも、それ、なんか、券を持ってないとできなかったの。☹️👄
44	37	*	JF002	あーあーあーあー。
45	38	*	JF001	でも、「人名7」店長が(うん)、「いいよ、いいよ、やってよ」とかいって(へー)やって(うん)、やらしてくれて、で、あたし、「人名5」さん以外の人は全員当たって、「人名5」さんは当たらなかったから(うん)、だからみんなで「人名5」さんにお米を、あげたりかしてて、なんか、いろいろサービスしてくれんの。☹️👄
46	39	*	JF002	ふーん。
47	40	*	JF001	で、なんか、あた、こないだ、あれいつだっけな、26日ぐらいに一(うん)、あたしがバイトに行ってたときに(うん)、あーの、「人名7」店長が来て(うん)、「あたしもう、こん、今月辞めるんですよー」(うんうんうん)とか言って[「とか」は非常に小さな声で]。

BTSJ-18 「の」の後に現れる接続詞の例(2) (会話番号 011)

つまり、「ノ」系で共通基盤化された内容とその後に展開される話の内容との意味的關係によって、「でも」と「で」が使い分けられているわけである。実際、これらの接続詞を飛ばして読んでみると、共通基盤化された内容とその後に展開される内容との関係が分かりにくくなり、話の流れも不自然になってしまうことがわかる。

一方、接続助詞「けど」を含む「んだけど」は、その直後に主節が続くのが一般的であるため、次の BTSJ-15 のように、「んだけど」の直後に接続詞や接続表現が現れにくいのは構造上当然であろう(「ンダケド」系の後に続く発話の文頭に接続詞や接続表現が現れた例は、180 例中 10 例 (6.1%) のみであった⁽¹⁷⁾)。

328	303	*	JM006	高1の終わりぐらいに(うん)、バドミントン関係で一、(うん)付き合ってたんだけど、笑い(うん)、段々さ、高2になってさ(うん)、ぼろくそになってくんだよ。 😊👄
-----	-----	---	-------	--

BTSJ-15(再掲[一部]) 「ノ」系と差し替えると不自然な「んだけど」の例
(会話番号 003)

かりに、BTSJ-15に現れている「んだけど」を「のね」などの「ノ」系に差し替えた場合、「段々さ」の前に「でも」なども接続詞が現れないと前後の関係が不明瞭になるため不自然に聞こえるのではないだろうか。

6.1.3.3 注釈としての「ンダケド」系

直前に述べた人・ものやことに注釈をつける際に「ンダケド」系が用いられることもある(李・吉田 2002)。このような例が今回の分析で7例見られた。以下(BTSJ-19)の670行目にもこの注釈の「んだけど」が2つ現れている。初めの「んだけど」は665行目に登場したJF092の友達の名前を注釈としてつける際に用いられており、2つ目の「んだけど」はその友達をいじめていた教頭が現在校長になっているという注釈をつける際に用いられている。さらに672行目でその教頭の名前を注釈としてつける際に「んだけど」が使用されている。

665	604-2	/	JF092	<地元でね>{)、友達が、今、ろうぎん、ええと、銀行??、みたいなとこ行ってんだけどー、
666	606	*	JF093	うん。
667	604-3	*	JF092	やっぱさ、地元でさ、昔習ってた小学校のときとかの先生とか、来る<わけよ>{<。}
668	607	*	JF093	<うんうん>{)、あー。
669	608	*	JF092	“あの先生いたよー”とかって。 😊👄
670	609-1	/	JF092	で、なんか、「人名2名」っていうんだけど、その子、「人名2名」は、めっちゃめっちゃ、小学校の時、いじめられてた、教頭先生が、今校長先生になってんだけど、 😊👄
671	610	*	JF093	げ。
672	609-2	*	JF092	「人名3姓」教頭つつーんだけど(うん)、すーんごい「人名2名」、いじめんの。
673	611	*	JF092	なんか【。 😊👄
674	612	*	JF093	】真剣に?。

BTSJ-19 注釈としての「んだけど」の例(会話番号 207)

こうした注釈としての「んだけど」は「ノ」系と互換性があるのだろうか。たとえば、670行目の2つ目の「んだけど」を「の」に差し替えて「教頭先生が、今校長になっているの」にすると、[当時教頭だった先生が現在校長になっている]ことがハイライトされ、注釈ではない印象を与える。「んだけど」を「のね」と差し替えた場合は、「の」と差し替えた場合より不自然さは軽減される。それは、6.1.3.1で述べたように、「ノネ」グループの意味機能と「ンダケド」系の意味機能は親和性が非常に高いからであろう。しかし、「のね」の場合は[当時教頭だった先生が

現在校長になっている]ことが話の展開に必要な前提となり、注釈ではなくなってしまう。

このことから、日本語教育への応用の際は、注釈をつけたい時は「ンダケド」系しか使えないことを指導すればよいと思われる。

7. おわりに

自然会話コーパスに収録されている雑談を分析した結果、話を展開させる下準備として話し手が聞き手との間で共通基盤にしている内容は、話し手のみが知っていることがもっとも多いことがわかった。また、話し手のみが知っていることを共通基盤化する際に「ンダケド」系と「ノ」系が非常に高い頻度で使用されていることもわかった。これらの2系統に関して今回の分析で得られた日本語教育に有益な主な情報を、以下、列記する。

- ・ 「ノ」グループは女性の使用が顕著である。
- ・ 「ノネ」グループは、話し手が後続する物語の内容に聞き手の注意を惹きつける際に使われる。
- ・ 「ノ」グループや「ノヨ」グループは、話し手が物語の中でより注目をしてほしい部分をハイライト化する際に使われる。
- ・ 「ノ」系で共通基盤化された内容とその後続く展開発話との意味的關係を明確にするため、展開発話の文頭に接続詞・接続表現が使用されることも少なくない。
- ・ 共通基盤化したい内容が物語の中で話し手がハイライト化したい部分の場合、「ンダケド」系は使えず、「ノ」グループや「ノヨ」グループが使われる。
- ・ 「ンダケド」系はすでに話した内容の注釈の用法がある。

なお、本稿で扱えなかった次の分析結果は本稿の続編で報告する予定である。

1. 話し手のみが知っている内容を共通基盤にする際に使われる「ンダケド」系および「ノ」系以外の言語形式・ストラテジー
2. 話し手と聞き手が共に知っている内容を共通基盤にする際に使われる言語形

式・ストラテジー

3. 聞き手のみが知っている内容を共通基盤にする際に使われる言語形式・ストラテジー

注

- (1) 「交流会話」には、雑談以外に、挨拶も含まれる（中井 2012）。
- (2) 「みんなの Can-do サイト」 (<https://jfstandard.jp/cando/top/ja/render.do>)
- (3) 「日本語能力試験 Can-do 自己評価リスト」 (<https://www.jlpt.jp/about/candolist.html>)
- (4) データ収集の方法として、清水 (2016) は、内省的観察以外に、①口頭インタラクション（自然会話、ロールプレイ、模擬タスク）、②筆記（談話完成タスク、多肢選択アンケート）、③自己報告（評価尺度法、口頭報告、ダイアリー・スタディー）の3種類を挙げている。
- (5) ここで言う中級とは市販の初級日本語総合教科書を終了したレベルで、上級とは中級日本語総合教科書を終了したレベルを指す。
- (6) 本コーパスの特徴に関しては宇佐美 (2020) を参照されたい。
- (7) 会話は、初めから終わりまで、話し手と聞き手という役割の入れ替わりが幾度となく起こるが、本稿では便宜上共通基盤を構築しようとしている会話参加者を「話し手」、その他の会話参加者を「聞き手」と呼ぶこととする。
- (8) 「BTSJ-」の後ろに現れる数字は本稿のための通し番号であり、『BTSJ 日本語自然会話コーパス（トランスクリプト・音声）2020 年度版』とはなんら関係がない。
- (9) BTSJ データ内には列（カラム）が5つあるが、それぞれの列は左から「ライン番号」「発話文番号」「発話文終」「話者」「発話内容」を表している。詳細は『基本的な文字化の原則（Basic Transcription System for Japanese: BTSJ）2019 年改訂版』を参照されたい（本ファイルは、<https://ninjal-usamilab.info/wp-content/uploads/2020/01/BTSJ2019.pdf> からダウンロードが可能）。
- (10) 本稿は、2020 年 11 月 21 日に行われた国立国語研究所（オンライン）シンポジウム「日本語教育は、自然会話コーパスで変わる！－『BTSJ 日本語自然会話コーパス』の特徴と日本語教育への生かし方－」で筆者の一人である西郷がパネリストとして発表した「しかもさー、おれ今、金、徴収してんじゃん」- 親しい友人同士の雑談での共通基盤構築に関して」の一部が基になっている。シンポジウム後の会話データの再分析の結果、発表時の共通基盤構築例数（228 例）から大幅に増えていることを付け加えておく。
- (11) 終助詞と間投助詞を区別するかしないかという議論は未だ結論が出ていない（伊豆原 2011；大江 2017；立部 2014；森田 2007）が、本稿ではこの点には踏み込まず、便宜上、文末に現れるものを終助詞、文節末に現れるものを間投助詞と呼ぶこととする。
- (12) 三枝 (2011) と同様、本稿ではこの「の」の品詞がなにかという点には踏み込まず、「単

純に「の」による体言化」(p.231)としておく。

- (13) ほぼ女性の使用に限られている「ノ」グループを男性が使うと、「もうすぐCDができるの。」とかなり女性っぽい発話になってしまうため、実質的に男性が使える選択肢は「ノ」系の中では「ノネ」グループと「ノヨ」グループしかないと言えよう。これが「ノヨ」グループの使用頻度が女性よりも高い理由のひとつである可能性もあり得る。しかし、「ノ」グループであっても、「の」の前の(ラ行の)「る」の音を「ん」に変化させて「もうすぐCDができんの」と言えば、女性っぽさはかなり軽減されるのではないだろうか。日本語教育への応用の際には、この音変化も一緒に教えれば、男性の学習者が使える選択肢が一つ増えることになる。
- (14) 男性の使用比率が明らかに女性よりも高かった「ノヨ」グループであるが、これは男性が女性よりも会話内容をハイライトする傾向が強いことを示唆している。しかし、なぜそのような傾向が強いのかという点に関しては今後の更なる考察が求められる。
- (15) 自身で録音した自然発話データを分析している西郷(2004)は、物語の中の平凡な内容(構成要素)の後ろには「のね」が、意外な内容(構成要素)には「のよ」が現れる傾向があると指摘している。
- (16) 「で」には順接の用法と添加の用法がある(山本2004)。
- (17) 10例の内訳は「でも」が8例、「で」が2例、「そうすると」が1例であった。

参考文献

- 伊豆原英子(2011)「間投助詞はどのように位置づけられてきたか」『愛知学院大学教養部紀要』第58巻 第3号 pp.1-12 愛知学院大学
- 宇佐美まゆみ(2020)「語用論的分析に適した『BTSJ 日本語自然会話コーパス』構築の趣旨と特徴」宇佐美まゆみ(編)『日本語の自然会話分析 BTSJ コーパスから見たコミュニケーションの解明』pp.1-19 くろしお出版
- 大江元貴(2017)「間投助詞の位置づけの再検討:終助詞との比較を通して」『語用論研究』第19号 pp.90-99 日本語用論学会
- 西郷英樹(2004)「日本語教師の会話分析—物語の中の「～ノネ」「～ノヨ」を例にとって—」『日本語教育連絡会議論文集』Vol.16 pp.64-72 日本語教育連絡会議
- 西郷英樹(2018)「依頼発話「来週の飲み会、来て」に付加された「ね」「よ」「やね」が後続発話に与える影響について」『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集』第28号 pp.1-21 関西外国語大学留学生別科
- 西郷英樹(2021)「学習者の雑談力向上のために何が教えられるか」『第二言語としての日本語の習得研究』第24号 pp.153-158 第二言語習得研究会
- 西郷英樹・清水崇文(2018)『日本語教師のための日常会話力がグーンとアップす

- る雑談指導のススメ』凡人社
- 才田いずみ (2017) 「雑談のコツを考える」『日本語教育方法研究会誌』 23 巻 2 号 pp.54-55 日本語教育方法研究会
- 三枝令子 (2011) 「話し言葉における文末の「の」の機能」『日本語/日本語教育研究 2』 pp.221-235 ココ出版
- 清水崇文 (2016) 「第 8 章 応用語用論」加藤重広・滝浦真人 (編)『語用論研究法 ガイドブック』 pp.217-238 ひつじ書房
- 清水崇文 (2017) 『雑談の正体：ぜんぜん“雑”じゃない、大切なコミュニケーションの話』凡人社
- 立部文崇 (2014) 「間投助詞「ね」と終助詞「ね」の区別に関する考察」『徳山大学 論叢』 第 79 号 pp.1-13 徳山大学経済学会
- 筒井佐代 (2012) 『雑談の構造分析』くろしお出版
- 中井陽子 (2012) 『インターアクション能力を育てる日本語の会話教育』ひつじ書房
- メイナード・泉子・K (2005) 『日本語教育の現場で使える談話表現ハンドブック』くろしお出版
- 森田笑 (2007) 「終助詞・間投助詞の区別は必要かー「ね」や「さ」の会話における機能ー」『月間言語』 2007 年 3 月号 pp.44-52 大修館書店
- 李徳泳・吉田章子 (2002) 「会話における「んだ+けど」についての一考察」『世界の日本語教育』 第 12 号 pp.223-237 国際交流基金
- 山本貴昭 (2004) 「談話における接続詞「で」の用法：女性話者の談話を対象として」『国文学攷』 181 号 pp.13-27 広島大学国語国文学会
- Yoshimi, D. R. (2001) Explicit instruction and JFL learners' use of interactional discourse markers. In K. R. Rose & G. Kasper (Eds.), *Pragmatics in Language Teaching* (pp.223-244). Cambridge: Cambridge University Press.

使用コーパス

宇佐美まゆみ監修 (2020) 『BTSJ 日本語自然会話コーパス (トランスクリプト・音声) 2020 年版』、国立国語研究所、機関拠点型基幹研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」、サブ・プロジェクト「日本語学習者の日本語使用の解明」(リーダー：宇佐美まゆみ)

謝辞

本研究は JSPS 科学研究費補助金・基盤研究(C)・JP20K00714 「雑談での聞き手との共通基盤構築に関わる表現・ストラテジーに関する調査とその応用」の成果の一部である。

(hsaigo@kansai.ac.jp)

(takafu-s@sophia.ac.jp)